

## 原著論文

# 「見かけの現在」の再検討 — A. シュッツの行為論の観点から —

飯田 卓\*

本稿では、A. シュッツの行為論に依拠して「見かけの現在」という概念を再検討し、つぎのことを導出する。第一に行為の企図の構成によって「見かけの現在」から「顕在的現在」が分化し、「現在」が二重化すること。第二に現実の行為（ワーキング）によって「顕在的現在」が唯一の「生ける現在」として現実化し、「現在」が三重化すること。第三に「見かけの現在」を背景に、「顕在的現在」が唯一の「生ける現在」から退くという仕方で、行為における時間が推移すること。最後にこれらの論点を敷衍し、時間の本質は人間の行為にあることを指摘する。

キーワード：時間、行為、現在、社会的時間

## Re-examination of the Concept of a “Specious Present”: From the Perspective of Alfred Schutz’s Theory of Action

Suguru IIDA\*

This study re-examines the concept of a “specious present” on the basis of Alfred Schutz’s theory of action, and elucidates the following: (1) Constituting projects differentiates “manifest presents” from a “specious present”, and thereby duplicates a present. (2) Actual action actualizes “manifest presents” as the only “vivid present”, and thereby triples a present. (3) Temporal transition in action is recognized as the way the “manifest present” retreats from the only “vivid present” against a “specious present”. Finally, dilating these issues, we point out time consists in action.

Keywords: Time, Action, Present, Social time

\*東京情報大学 総合情報学部  
Faculty of Informatics, Tokyo University of Information Sciences

2017年5月15日受付  
2017年7月14日受理

## 1 序論——問題の所在

A. シュッツの社会理論において、「現在」という時間様相は、理解社会学の根幹にかかわる他者論の文脈においても自己論の文脈においても、反省的態度によって分割できない体験の様相として格別の地位を占めている。それは第一に、シュッツがM. シェーラーのわれわれの先与性の議論に条件つきで同意しながら、「われわれは反省作用なくしてわれわれという生ける同時性に関与するのに対して、私は反省的対向を経由してはじめて姿を現す」(Schutz 1962: 175) [11]と指摘することによって、「現在」という時間様相において私の意識の流れと他者の意識の流れとの「同時性」が成立し、この「現在」においてのみ「他我存在の一般定立」によって特徴づけられる相互主観的領域が成立すると考えているからである。また第二に、G. H. ミードの主我と客我の議論を引き合いに出しながら、「反省的態度における自己が完遂された諸々のワーキング行為を振り返り、それらを過ぎ去った形で捉えるならば、そうした自己の統一性は崩れ去ってしまう」(Schutz 1962: 216) [11]と指摘することによって、「現在」においてのみ「ワーキングのさなかにある自己は自らを分割されえない全体性を持った自己として体験する」(Schutz 1962: 216) [11]ことができると考えているからである。

このように、「現在」という自明視された時間様相は、反省以前に成立する相互主観性と反省的態度によって捉えられない自己の統一性を保証するが、シュッツは「現在」の構造を分析する際、しばしばW. ジェームズの「見かけの現在」という概念を援用する。それは文脈に応じて「生ける現在」あるいは「直接的現在」とも言い換えられ、基本的には「現在」というものが、時間系列における数学的意味での点ではなく、過ぎ去った諸要素と来たらんとする諸要素を含みながら厚みを持って構成される様相であることを示す概念である。加えてシュッツは、この概念について、E. フッサールの「内的時間意識」との照応、運動の分割不可能性という観点からの「意味連関」の単位の析出、「過去」と「未来」から「現在」を境界画定する機制的解明、「見かけの現在」の共有の議論など独自の展開を試みている。

ただし、ここでは知覚における「見かけの現在」

と行為における「見かけの現在」が、したがって「現在」の二重の位相——A. アウグスティヌスの言う「現在についての現在」(Augustini 1981 [2007]: 239) [3]——が区別されてはいるけれども、両者の関係が十分に問われていないように思われる。これは直接的には、シュッツが「体験的時間」(志向的体験)と「主観的時間」とを区別するものの、両者を関係づけていないことに起因する。だが、「体験的時間」において反省的態度にかかわりなく流れ続ける位相と、反省的態度のもとに構造化される位相は、明確に区別されたうえで関係づけられなければならない。そして、このような事情が「見かけの現在」という概念を曖昧にしているだけでなく、この概念が持つ内包を狭小化しているように思われる。なぜなら、行為における「見かけの現在」は第一に垂直レベルで分化し「現在」が二重化すると考えられるからであり、第二に分化した高次の「現在」は水平レベルで複雑に入り組んだ構造を持ち、もはや単純に「現在」とは言えないほど多様な時間的諸要素から構成されると考えられるからである。

たしかにシュッツの立場は、アウグスティヌスからジェームズ、H. ベルグソン、フッサールに至る、意識内在的に時間を捉える立場の系譜上に位置づけることもできる。しかし彼らとの決定的な違いは、シュッツの時間概念が企図を中心とする行為論、したがって「完遂された行為」と「進行中の行為」とを厳密に区別したうえで統一する行為論と、そのような行為連関から成る生活世界論に支えられている点にある(飯田 2009) [4]。この違いが、「現在」、「過去」、「未来」という時間様相をそれぞれ多層的・多層的なものとして捉える見方に繋がるのである。

そこで本稿の目的は、シュッツの行為論に依拠して「見かけの現在」という概念を再検討し、これまで一元的・単層的なものとして捉えられる傾向にあった「現在」、「過去」、「未来」という時間様相を再考することにある。まずはシュッツの「見かけの現在」に関する論述について、知覚を中心とする論述と行為を中心とする論述とに分けて確認し、そこに見られる問題点を指摘する(2節)。つぎにシュッツの行為論を確認したうえで、行為の水準における「見かけの現在」を分析する(3節)。行為の水準における「現在」は「見かけの現在」から垂直的に分化した「顕在的現在」であり、ここでは複数の企図

に対応して複数の「顕在的現在」がありうることを指摘する。そして「現在」の複数性と「現在」の唯一性とを区別し、後者こそ「現在」の核心にあることを示すとともに、「単位行為」と「連続性」という観点から「現在」、「過去」、「未来」の関係を考察する（4節）。さらに、以上の論点を踏まえて行為における「時間的推移」について考察し（5節）、最後に、「現在」という時間様相において確認された時間構成のあり方を敷衍することによって、時間を行為の関数として捉える行為論的観点とその意義について論じる（6節）。

## 2 現在の諸相——顕在的現在と潜在的現在

ジェームズは経験というものを「意識の流れ」として捉え、意識が時間的な広がりをもって持続することを「見かけの現在」という概念によって表現する（James 1950: 608-609）[7]。この概念はもともと E. R. クレイが無記名の書物のなかで提起し、ジェームズが拡大継承したものであるが、心理学ではおもに知覚を分析する際の枠組みとして用いられてきた。「見かけの現在」は「厚みを持った現在」として、持続0と想定される「精密的現在」あるいは「瞬間的現在」と対置されるが、クレイが過ぎ去った諸要素のみを「現在」に含めたのに対し、ジェームズは来たらんとする諸要素も含めて「現在」を捉え直し、「過去」の方向へ過ぎ去った諸要素と「未来」の方向から来たらんとする諸要素から成る「持続」として拡大された。他方、「精密的現在」という概念は、「現在」を時系列における点として捉えることであり、無際限に分割可能な「空間化された時間」には適用可能であっても、意識や存在には適用が困難な考え方である。意識は時間的な広がりをもって体験され、そのような意識と志向的に相関した対象や出来事もさまざまな程度で有限の持続を持つからである。さもないと、R. デカルトが主張し、それによって神の存在証明を企てたように、世界は瞬間ごとに創造されることとなるだろう。かくして「見かけの現在」という概念は妥当なものとして広く受容され、とくに哲学の領域において——現象学的哲学だけでなく、A. N. ホワイトヘッド、G. H. ミード、B. ラッセル、J. E. マクタガートらにおいても——ジェームズの業績は高く評価されることとなった。それでは、シュッツは「見かけの現在」をどのよ

うに解釈し、どのように展開したのだろうか。まず、知覚における「見かけの現在」の論述を確認する。

「実際の現在とは、ある瞬間ではなく継続的に変化しつつある内容に対して存続し続ける形式である。実際の印象とは、継続している一連の把持の、あるいは別の方向から言えば継続している一連の予想の限定された位相にほかならず、把持と予想の連鎖は志向的關係の継続的継起として解釈される。それゆえフッサールが述べるように、経験される実際の現在はいずれも、内容によっていつも必然的に充実されている体験された過去という地平を伴うとともに、空虚であるか、予想された未来の現在という内容によってのみ充実される未来という地平を伴っている。このことは、現在の瞬間はいずれもその周りに、純粹自我の原初的なひとつのフリンジを構成する諸経験の「フリンジ」、すなわち純粹自我の原初的な今—意識の全体を伴っていることを意味する。ジェームズの研究者であれば誰でも、フッサールのこのような基本的概念のなかにジェームズの有名な「見かけの現在」についての理論を認めるだろう」（Schutz 1966: 11）[13]。

「内的時間が諸々の構成要素に分解できないという洞察は——点や距離という空間的諸要素を想定することができ、なおかつ測定さえ可能な空間化された時間と対照的に——現在という概念がなお考慮に値することを示している。われわれの生ける諸経験を構成している現在という概念は決して計測可能な点ではないし、単なる瞬間でもなく、また過去と未来とのあいだの理念的限界でもない。現在をこのように単なる瞬間として想定するならば、それは空間の幾何学あるいはその類推、すなわち空間化された時間から取り入れられた抽象概念になるだろう。生ける現在は実際に生きながらえているあらゆるものを包含している。具体的に言えば、そこには、今において把持され、想起される過去の諸要素が含まれており、また予持と予想によって今に開かれている未来の諸要素も含まれているのである。われわれが生きている現在は、ジェームズがそう呼ぶようにつねに見かけの現在であり、それ自体構造を持ち、前と後を含んでいる。現在には過去と未来という



まったく同等ではない諸要素が含まれるのである」(Schutz 1996: 257) [16]。

「現在の思惟は、それをたった今起ったことと、すぐ後に起ると予期されうることに結びつけている把持と予持というフリンジに取り巻かれており、想起によってより遠く隔たった過去の諸思惟と関わり、予想によって未来の諸思惟と関わっている」(Schutz 1962: 109) [11]。

意識とは「今このように」から新しい「今このように」へと移行してゆく不可逆的な「体験経過」である。この体験は、異質な諸要素が相互に浸透し合いながら連続的に変化してゆく質的多様性の流れという意味で「持続経過」とも呼ばれる。そこでは先行の体験を把持的変様態として同時に構成しつつ、後続の体験へと予持によって同時に方向づけられている「体験連関」が見られ (Schütz 2004: 139) [18]、ここに把持と予持の連関という厚みを持った「見かけの現在」が構成される。そうすると、上記の引用には区別されなければならない諸要素が混在しているように思われる。「現在」には把持と予持によって受動的に掴まれる諸要素だけでなく、それらと結びついた想起と予想によって能動的に掴まれる諸要素も含まれている。だが、両者の諸要素は同次元で語れるものだろうか。「見かけの現在」が、現象学的哲学における「現在野」と同様に、いまだ「過去」でも「未来」でもない把持と予持の連鎖から成立すると見るのは容易いが、「過去」と「未来」の諸要素が含まれるという点をどのように考えればよいだろうか。「過去」と「未来」が措定されるためには、「見かけではない現在」すなわち「境界画定された現在」が措定される必要があるのではないだろうか。ここでは問題点を指摘するに留め、前もって行為における「見かけの現在」の論述を確認しておく。

「今をよりはっきりと境界づけることができるのは行為する自我だけであり、今の境界は現実の企図の及ぶ範囲によって限界づけられる」(Schütz 2003: 127) [17]。

「現在がどのような様態になるかは、ベルグソンが意識の緊張と呼ぶものによって決まる。だが、この

緊張それ自体はわれわれの生への注意の相関物にすぎない。生が要求するのは外的世界の内部で行為し、その諸対象を扱い、外的世界を掌握することであり、そしてこうした活動すべてを他の人々と協力して成し遂げ、仲間をわれわれの行為の対象にし、また仲間によって動機づけられることである」(Schutz 1996: 257) [16]。

「見かけの現在は思い描かれた企図の及ぶ範囲によって、そのときどきに定義される。すなわち企図された課題として以前措定され、その解決がちょうど今進行中である諸問題をその最前部に含み、その最後部は当面の問題の解決のために構想された進行中の理論化活動の、予想される結果のなかに存在している」(Schutz 1962: 253) [11]。

「われわれは、外的時間と内的時間という両次元を生ける現在と名づけた単一の流れに統合し、そうすることによってワーキング行為を外的時間において生じる一連の出来事として体験すると同時に、内的時間において生じる一連の出来事としても体験する」(Schutz 1962: 216) [11]。

「実のところ、この今は瞬間ではない。それはW. ジェームズとG. H. ミードが見かけの現在と呼んできたものであり、過去と未来の諸要素を含んでいる。企図することは、この見かけの現在を統一し、その境界線を定めることである。過去に関するかぎり、その限界は、現在の企図にとって依然としてレリヴァントである利用可能な知識部門のなかに、沈殿し保持されている最も遠い過去の経験によって規定される。未来に関するかぎり、その限界は、現在思い描かれている企図の幅によって、すなわち未来完了時制においてなお予想される時間的に最も遠い行為によって規定される」(Schutz 1964: 291) [12]。

ここではおもに「現在」の境界が主題化され、未来完了時制に向かう反省、したがって企図の構成を通して、「現在」、「過去」、「未来」の境界が画定されることが指摘されている。すなわち「見かけの現在」は、把持の連鎖が到達する限界として指示される「過去」と、予持の連鎖が到達する限界として指示される「未来」の両者から画定された「現在」と

なる、ということである。本稿ではこのようにして境界づけられた「現在」を「顕在的現在」と呼び、企図とかかわりなく流れ続ける「見かけの現在」と区別する。企図の構成によって「見かけの現在」が「顕在的現在」として構造化されることは、「見かけの現在」を地平として「顕在的現在」が前景化し、「現在」が二重化することである。逆に、この「顕在的現在」と差異化された「見かけの現在」は、「潜在的現在」として位置づけられるだろう。ただし「見かけの現在」そのものに外部はないのだから、われわれは「顕在的現在」と「見かけの現在」の両者に同時に属するという点には留意しておく必要がある。なお、4番目の引用の「生ける現在と名づきたい単一の流れ」という概念については4節で触れる。

ここで、先に指摘した知覚における論述の問題を併せて検討するならば、何よりも「現在」の二重性に着目しなければならない。引用文中の「見かけの現在」における「過去」と「未来」の諸要素とは、一方で「見かけの現在」から垂直的に分化した「顕在的現在」における諸要素と考えられる。他方でそのように構造化された「顕在的現在」から逆照射的に導かれる「潜在的現在」すなわち「見かけの現在」の諸要素とも考えられる。シュッツがベルグソンに依拠しながら、「持続のなかで素朴に生きる場合、そこにはただ流動的で境界のない相互に絶えず移行し合う体験がみられるのみである」(Schütz 2004: 145)[18]と論じるように、後者において「現在」、「過去」、「未来」は分節化されておらず、せいぜい把持と予持の連関が見られるだけである。この意味で「見かけの現在」とは、誕生と死によって区切られる生全体に対応した「現在」であり、垂直的に分化した「顕在的現在」が事後的に反映されて、言い換えれば事後的な反省によってはじめてそこに「過去」と「未来」という時間的諸要素を見出しうる自明視された位相なのである。だが、問題はまだ残されている。企図の構成によって「現在」が境界画定されるとしても、そこでの「過去」と「未来」は「現在」の境界の内部に位置づけられるのだろうか、それとも外部に位置づけられるのだろうか。この問いに答えるためには、「過去」と「未来」それ自体の分節化がある程度求められるだろうし、「現在」、「過去」、「未来」の関係についても立ち入って検討しな

ければならないだろう。さらにこの問題と関連して、企図の構成が「現在」、「過去」、「未来」を分節化する点は認めるとしても、大部分の行為は、単一の企図ではなく複数の企図によって方向づけられている。この場合、それぞれの時間様相の境界をどのように考えればよいのだろうか。加えて、境界画定の主体は、私にかぎられるのだろうか。他者によって、あるいは相互行為のなかで境界が画定される可能性はないのだろうか。以上の問題を考察するための手がかりとして、つぎにシュッツの行為論を確認する。

### 3 行為と現在——諸企図の構成と複数の現在

シュッツは行為を「前もって与えられた企図へと方向づけられた行動」(Schütz 2004: 155)[18]と定式化する。企図とは生活史的に規定された当面の関心と実行可能性に制約されながら (Schütz 1962: 72-74)[11]、空想的想像作用において「完遂された行為」を予想することである (Schütz 1962: 73, Schütz 2004: 157-159)[11][18]。すなわち、反省的態度において構成した有意義な過去の諸行為を任意の未来完了時制へ反転させるのである。したがって、未来完了時制に措定される過去の諸行為は、当面の目的にとってレリヴァンスを持ち、なおかつ「現在」の行為の目的志向と類型的に同型の「完遂された行為」となる。そして、この「完遂された行為」に方向づけられ、それ自体は前反省的な「進行中の行為」の位相が、行為者にとっての「顕在的現在」となる。さらにシュッツはジェームズに依拠しながら、企図を目的に変換して実現しようとする決断を自発的「フィアット」と呼び (Schütz 1962: 67)[11]、この「フィアット」に導かれて、実際に外的世界に介入する行為を「ワーキング」と定式化する。「ワーキングとは企図に基づきながら外的世界においてなされる行為であり、なおかつ企図された事態を身体上の動きを通して実現しようとする意図によって特徴づけられる行為である」(Schütz 1962: 212, cf. 216)[11]。ただし外的世界の諸対象は、人間の努力によってのみ克服されるような抵抗を与えることによって自由な行為の可能性を制限する (Schütz 1962: 209, 227, 342)[11]。それゆえ行為を現実化するにあたって、世界の時間-空間的な存在論的構造

が顧慮されなければならない。ここに意識に内在した「顕在的現在」が、意識を超越した「客観的時間」に投影され、「主観的時間」として相対化される契機を見出すことができる。ただし、これは事態の反面に過ぎない。

時計時間や暦に代表される「客観的時間」は、どれほど正確に測定されるようになって、もっぱら量的にのみ思惟される時間の外延的規定であって、それ自体はほとんど意味を持たない。「客観的時間」は天体運動をはじめ、現在では振り子や水晶の代わりに、セシウム原子の状態を変化させる電波の振動を基準に構築されるが、アリストテレスが指摘するように、時間とは転化（変化・運動）そのものではないが、転化なくして存在するものではない（Aristotle 1955 [1968]: 168-169）[2]。すなわち時間という現象は単独で成り立つものではなく、二つ以上の出来事（変化・運動）の相関のうちに、たとえば意識あるいは行為と、天体あるいは時計針の運動の相関のうちにあると考えなければならない。時間を転化と同一視することができないのは、そこでは、転化を認識するための「過去」、「現在」、「未来」から成る時間意識が前提されているからである。しかし、だからといって、時間意識そのものが時間であるというわけでもない。それゆえ「持続と宇宙的時間の交差」（Schutz 1962: 216）[11]、言い換えれば「主観的時間」と「客観的時間」の交差とは、「現在」、「過去」、「未来」を構成する人間の行為が「客観的時間」に実質的な意味と内容を与えるとともに、この「客観的時間」が各々の時間様相の具体的時点を同定するという、両者の相互反映的な関係を示している。だからこそ、時計時間はそこにおいてなされるべき役割行為を指示しうるし、たとえ時計を参照しなくてもある種の役割行為そのものが、時計に代わって時間を指示しうるのである。その際、行為者が基本的に配慮するのは、各々の目的を実現するために時間がどの程度あるのか、時間がどの程度かかるのかといった「あいだ」としての時間であって、時刻や時点としての時間は「あいだ」を区切るためにのみ用いられる点に留意する必要があるだろう（Aristotle 1955 [1968]: 173, 土屋 1985: 52）[2][20]。

ところで、多くの場合、行為の目的はさらに上位の目的のための中間目的にすぎない。シュッツは、この上位の差し当たった最終目的を、探求のレベ

ルを規定する「至高の企図」と呼ぶ。「至高の企図」とは「行為者の実際の関心が、その地点を越えてレリヴァンスの動機的な相互連鎖を追求することをもはや要求しない、そうした地点を境界づけるものである」（Schutz 1970: 51）[14]。それゆえ「至高の企図」は「目的動機」として、最終目的を実現するために必要な個々の段階を動機づけ、下位の諸企図を構成することになる。そして、つぎに引用するように、ある当面の目的が、それを包括する上位の目的を達成する手段であるなら、目的は同時に手段でもありうる。「いかなる目的も、他の目的のためのひとつの手段であるにすぎない。いかなる企図もより高次のシステムの内部で企図される。（中略）われわれが企図する目的は、前もって考えられた特定のプラン——時間や年間のプランであろうと、仕事やレジャーのプランであろうと——のうちでは手段である。そしてこれら特定のプランはすべて、たとえ下位の諸プランが相互に葛藤しているとしても、それらを規定するもっとも普遍的なプランとしてのライフプランに従属する」（Schutz 1962: 93, cf. Schutz 1962: 23-24）[11]。

かくして単一の企図ではなく、複数の企図を認めることは、複数の「顕在的現在」を、したがって複数の「現在」、「過去」、「未来」を認めることでもある。上位の企図に定位するならば、その実現手段としての下位の諸企図をひとつの「現在」としてみなしうが、下位の企図に定位するかぎり、複数の「顕在的現在」を認めざるをえない。さらに、ある目的を達成する諸手段としての諸行為は、それぞれ時間的に隣接する場合もあれば離接する場合もありうる。離接する場合、そのあいだに別の目的を達成する手段としての行為が挿入されることも考えられるだろう。たとえば、ある「至高の企図」Pに動機づけられて下位の諸企図p4、p3、p2、p1が構成されるが、これら下位の企図は必ずしも隣接せず、p2とp3のあいだに、別の「至高の企図」P'に動機づけられた下位の企図p'2が挿入される場合もあるだろう。この場合、p3に方向づけられた行為を中断したうえでp'2を実現しようとする行為がなされるという意味で、p3に方向づけられた「顕在的現在」の内部にp'2に方向づけられた「現在」「過去」「未来」が浸入することになる。このように、ある企図に方向づけられた「顕在的現在」の内部に、別



の企図に方向づけられた「顕在的現在」における「過去」と「未来」が浸入する構造をどのように理解すればよいだろうか。この問題を考察するためには、任意の諸時点が等しく「現在」でありうることと、特定の時点がまさしく「現在」であることを区別することが必要である。それゆえ、つぎに意識における主題と地平の対位法的構造という観点から、主題として現実化される「現在」について検討する。

#### 4 現実化される現在——顕在的現在から生ける現在へ

意識における主題と地平の対位法的構造とは、「現実的トピックと周縁的トピックの両方を保持しうる能力」である。このような能力のおかげで「われわれは多声音楽曲の聴き手と同様、同一の流れのなかで同時に進行している二つの独立した主題をその一方を焦点の中心とし他方を周縁としながら、あるいはその逆にしながら辿ることができる」(Schutz 1970: 120) [14] ののである。そして、この主題と地平を区別する対位法的構造の基礎には、「多様な現実領域を同時に生きること、すなわち多様な意識の緊張や生への注意の多様な様態、多様な時間次元を同時に生きること、様々なレベルの人格が作動していること、それら人格の諸レベルそれぞれの付随している主題と地平は対位法的に分節化されていること、これらはすべて様々なレリヴァンス構造間の相互交錯という単一の基本現象の現われである」(Schutz 1970: 15, cf. Schütz 2003: 125) [14] [17] と指摘されるように、レリヴァンスという諸関心の構造化原理がある。

さて、意識の対位法的構造によって現実的トピックと周縁的トピックが区別されるならば、実際に行が進行しているという意味で現実化している「顕在的現在」と、現実化の可能性に開かれた「顕在的現在」は区別されなければならない。両者の違いは、現実化している「顕在的現在」は唯一であるのに対して、現実化しうる「顕在的現在」は複数ありうるということである。さらに5節の議論を先取りすれば、現実化している「顕在的現在」には時間的推移が認められるが、現実化しうる「顕在的現在」にはそれが認められないという事情もある。そして、この唯一の「顕在的現在」こそ、外的世界に介入する「ワーキング」と結びつき、持続と「宇宙的時間」

(客観的時間) が交差することのなかから生じてくる「生ける現在」(Schutz: 1962: 216) [11] にほかならない。「生ける現在」は「現在」をまさしく「現在」たらしめる点で「現在」の核心にあり、ここに「見かけの現在」から「顕在的現在」、そして唯一の「生ける現在」へという現在の三重化を指摘することができる[注1]。その際、現実化可能な「顕在的現在」は周縁的トピックとして同時に保持されるが、場合によっては、様々な事情で現実化されないまま忘却されることもあるだろう。

それゆえ前節で指摘した複数の時間様相の問題は、「顕在的現在」と「生ける現在」を区別していないことから生じる疑似問題であり、ある「顕在的現在」の内部に別の「顕在的現在」が浸入すると考えるのは無意味である。そこでは、外的世界における無数の活動の併存的遂行や無数の事物の併存的経験を制限する「同時性の秩序」(Schutz 1970: 118) [14] を等閑視して、現実化しうる「顕在的現在」を現実化している「生ける現在」と同時に現実化させようとしているからである。そうすると、ある企図に方向づけられた行為の「顕在的現在」は状況に応じて現実化されたり周縁化されたりすることになるが、このとき、そのつどの「顕在的現在」の現実化には時間的隔たりがあるにもかかわらず、ある行為の「現在」の同一性は「以下同様」の理念化 (Schutz 1970: 117) [14] によって確保されうると考えられる。それでは、互いに主題と地平の地位を交代しあう行為  $\alpha$  と行為  $\beta$  の「現在」それぞれに統一性を与えつつ両者を区別する機制は何だろうか。

「未来」が企図の構成という仕方で先取りされるならば、しかも先取りされた「未来」が「現在」の行為を方向づけ意味を与えるならば、「現在」と「未来」は意味的に連続しているとみなしうる。このことは、「意味連関」という単位が、行為を統一的なものとして纏め上げていることを意味している。ここに企図に基づく「単位行為」という考え方が成立する。シュッツによれば「意味連関は下位単位に分割可能であるが、原子論的取り扱いには抵抗する。ここで触れられるのは、企図された行動、すなわち行為の企図の射程それ自体による統一である。(中略) 行為者は自らの行為のなかで生きている際には、この企図された目標あるいは目的だけを念頭においており、そしてまさしくそうであるがゆえに、

行為者は自らの行為過程全体をひとつの意味単位として経験する」(Schutz 1970: 97, cf. Schutz 1962: 24) [14] [11]。あるいは「行為の統一性はもっぱらこの企図によって構成され、この企図の幅は行為のはっきりとした計画性の程度に応じて様々でありうる」(Schütz 2004: 197, cf. 101, 202) [18]。

したがって、ある「顕在的現在」を中心とする「過去」と「未来」の座標と、別の「顕在的現在」を中心とする「過去」と「未来」の座標は、レリヴァンスという諸関心のシステムのもとに区別され秩序づけられていると考えられる。それぞれの行為の企図ごとに「理由レリヴァンス」と「目的レリヴァンス」が異なるからである。このようにして、「ワーキング」は全ての行為と同様に、行為する自我として今の自我に属しており、企図（理由動機）によって以前の私の自我に、企図の幅（目的動機）によって以後の私の自我に結びつけられている」(Schütz 2003: 135) [17] のである。さらに、どちらを「顕在的現在」として現実化し、どちらを周縁化するかは、「現実化のレリヴァンス」という一段高次の動機的レリヴァンス (Schutz 1970: 118) [14] に依存する。このような複数の「顕在的現在」を中心とする諸座標が、「現実化のレリヴァンス」のもとに「重要なことから先に」[注2] (Schutz 1970: 118) [14] という仕方で「客観的時間」という時系列にあらかじめ配置されるならば、「顕在的現在」——ここでは「主観的時間」と呼びうる——と「客観的時間」との交差から生じる「あいだ」としての時間は、時間的に隣接し意味的にも連続している位相、時間的に隣接するが意味的には連続していない位相、時間的に離接し意味的にも連続していない位相、時間的に離接するが意味的には連続している位相という4つの位相から構成されることになるだろう。

かくして、2節で指摘した「過去」と「未来」が「現在」の内側に位置づけられるのか否かという問いに答えることができる。実は企図の構成の段階では、単一の企図であればともかく、複数の企図を想定するかぎり、この問題に十分には答えられない。すなわち、「ワーキング」とともに現実化している「生ける現在」と意味的に連続し、かつ行為者が念頭に置いているかぎりで、「過去」と「未来」は「現在」の内側に位置づけられ、そうではない場合は、「現在」の外側に位置づけられるのである[注

3]。たとえ「至高の企図」に収斂する点で下位の諸企図が意味的に連続していても、行為者がどの程度まで先を見越すかに応じて、「過去」と「未来」は内側に位置づけられたり外側に位置づけられたりする。「過去」と「未来」は——アウグスティヌスの言う「過去についての現在」、「未来についての現在」のように——任意の現実化された「生ける現在」にとって意識されるという意味で現在化されたものと、意識されないという意味で「生ける現在」から切り離されたものとに区別できるのである。もっとも、その垂直レベルにおいては、「見かけの現在」が「潜在的現在」として、「生ける現在」と切り離された「過去」と「未来」をも包摂してしまうのであるが。というのも、「見かけの現在」に境界線が引かれることは「顕在的現在」が分化することにほかならず、「見かけの現在」そのものは分割されず無境界のままにとどまるからである。このかぎりでは境界線それ自体は「現在」の外部に属していると考えなければならない。だからこそ、境界づけられた「現在」「過去」「未来」は「見かけの現在」に回収されてしまうのである。そして次節で検討するように、この「見かけの現在」と「顕在的現在」との差異における相関こそが、行為における時間を推移させるのである。

だが、その前に、2節で指摘した境界画定の主体の問題について触れておく。企図を構成する契機は様々な考えられるが、社会的存在たる人間にとって最大の契機は他者の存在だろう。シュッツが「われわれは自らの生にとって不可避な他者の存在によって、志向的体験を空間化するよう強いられる」(Schütz 1981: 81) [15] と主張するように、他者の「内在的レリヴァンス」が賦課されることで、自らの「内在的レリヴァンス」体系を追求する自由が制約されるのである。この文脈において他者は目的を実現しようとする私の行為を——良い意味でも悪い意味でも——妨害する障害物として立ち現れる。こうした状況のなか、それまでの行為を中断ないし放棄し、他者の「現在」に合わせて私の「現在」を境界づけるとしたら、果たして私がこの境界線を引いていると言い切れるだろうか。このようにみると、「顕在的現在」は、その大部分が他者との相互行為のなかで構成されるものであり、純粹に内発的な仕方では構成されるほうが稀だろう。この点について



は、稿をあらため、時間のコミュニティ論 (Schutz 1996: 63) [16]と併せて論じることとしたい。

## 5 行為における時間的推移——非連続の連続

「意識の流れ」という表現に見られるように、シュッツは時間的推移を、ある「今このように」から新しい「今このように」へと流れる人間の「体験的時間」に即して捉えている。アリストテレスが「今はある意味では同じものであり、ある意味では異なるものである」(Aristotle 1955 [1968]: 171) [2]と指摘するように、どの「今」も同じ「今」ではあるけれども、たえず異なる「今」になるという意味で、「今」は同一性と差異性によって特徴づけられるのである。「今」において捉えられる対象の側に着目するならば、そのつどの「今」において対象の変化を捉えられるという意味で、「今」の内容が異なるというものは、「今」が形式としては同一だからである。あるいはまた、そのつどの「今」において変化を通じて同一の対象、すなわち対象の意味的同一性を捉えられるという意味で、「今」の内容が同じであるというものは、「今」が形式として時間的に差異化されているからである。いずれにせよ、ここに時間的推移を不可逆的なものと捉える契機を見出せる。たえず異なる「今」になるということは、すべての「今」が前後関係で区別されることである。この前後関係という区別は、人間の記憶に依存する。過ぎ去った諸体験を想起・反省によって固定し、引き続く体験と対比することで「今このように」の範囲が定まり、そこに先行の「今このように」(過去)と後続の「今このように」(現在)が区別される (Schütz 1981: 101) [15]。ここでは「過去」から「現在」そして「未来」への時間的推移が見出せるだろう。あるいは、企図は未来完了時制に向かう反省であるから、未来における「完遂された行為」と引き続く体験(進行中の行為)を対比することで、先行の「今このように」(未来)と後続の「今このように」(現在)が区別される。ここでは「未来」から「現在」そして「過去」への時間的推移が見出せるだろう。このように記憶を媒介とする順序づけが、時間的推移を可能にするのである。たとえば一方の「現在」が顕現すると同時に他方が後退し、再び他方の「現在」が顕現すると同時に一方が後退す

るような主題と地平の交代という仕方で時間は推移しうるし、企図の構成とともに新しい「現在」が顕現し、それまでの「現在」が「過去」へ移行するという仕方で時間は推移しうる。

しかし、このような意味で時間が推移すると言いうるためには、そこに——事後的な反省による——継起的体験は認められても、「過去」へ移行しないような地たる背景が必要である。このような背景こそ、そこから「顕在的現在」が分化した「見かけの現在」という潜在的地平にはかならない [注4]。「見かけの現在」においては先行の体験を把持的変態として同時に構成しつつ、他方で後続の体験へと予持によって同時に方向づけられた継起的な——ベルグソンの純粹継起は同時並置による前後関係も認めないが——「体験連関」が見られるだけであり、いまだ「現在」、「過去」、「未来」という時間様相は構成されていない。このような仕方で意識が流れているからこそ、「生ける現在」における企図の実現ないし中断や放棄によって新しい「顕在的現在」が立ち上がり、それまでの「顕在的現在」が「生ける現在」から退くという仕方で時間が推移するのである。それまでの「顕在的現在」から新しい「顕在的現在」へ移行するということは、両者のあいだに断絶を認めることでもある。この断絶性によって両者は隔てられながらも、「見かけの現在」によって両者は架橋される。すなわち、この断絶性こそが「意識の流れ」によって特徴づけられる「見かけの現在」の連続性を顕現化し、断絶性を連続性のうちに回収するのである。この意味で断絶とはつねに連続における断絶であるが、この連続は断絶によってはじめて顕現化するという意味で、両者は相互規定的な関係にある。それゆえ、ここには「非連続の連続」という行為における時間的推移の特徴を指摘することができる [注5]。

## 6 結論にかえて——社会的時間論の哲学的基礎

本稿で解明したことは、大きく分けてつぎの3点である。第一に企図の構成によって「見かけの現在」から「顕在的現在」が分化し、「現在」が「顕在的現在」と「潜在的現在」に二重化すること。第二に現実の行為(ワーキング)によって、「顕在的現在」が唯一の「生ける現在」として現実化し、「現

在」が三重化すること。第三に「見かけの現在」を背景に、「顕在的現在」が唯一の「生ける現在」から退くという仕方で行為における時間が推移すること。これらの論点を踏まえて、「現在」という様相は行為とともに構成される、とすることができる。シュッツの行為論が反省的態度のもとに構成される「完遂された行為」と、前反省的な「進行中の行為」とを統合する仕方では構築されているように、彼の時間論は「完遂された行為」が指定される「客観的時間」と、「進行中の行為」とともに生きられる「主観的時間」とを統合する仕方では構築されているのである。そして、シュッツが「単位行為」を企図の幅の関数 (Schütz 2004: 161) [18] と表現していることになれば、「現在」という時間様相は目的を達成しようとする行為の関数であり、当該の「現在」は「過去」と「未来」とともに構成されるのだから、時間は行為の関数であると言ってよいだろう。このように時間を行為の関数として捉えることこそ、時間を行為論的観点から捉えることにほかならない。ここでは、その基本的な考え方を素描するとともに、社会科学における意義について若干触れることにしたい。

時間を行為論的観点から捉えることは、第一に時間という現象のどの側面が自然の側に属し、どの側面が社会・文化・歴史の側に属し、どの側面が行為の側に属し、どの側面が生物あるいは生命体の側に属すのかということを区別したうえで関係づけようとする。たとえば、人間の皮膚を境界にして、自然の転化によって生じる外部のリズムと、生物の構成要素の転化によって生じる内部のリズムは相関しており、そこにはすでに連続と分節という根源的な時間の萌芽が認められる。それゆえ、たしかに時間構成の核に行為があることは認めるが、時間という複雑な現象をそれだけに還元し、そこから基礎づけようとするわけではない。あるいはまた現象学的哲学のように、原自我の先-志向的体験からあらゆる時間を基礎づけようと試みるわけでもない。したがって、時間を構成する行為者がそれ自体、時間のなかにあるという自己言及的循環を重視する [注 6]。言い換えれば、「行為のなかの時間」と「時間のなかの行為」、あるいはB. アダムの言う「出来事のなかの時間」と「時間のなかの出来事」 (Adam 1990) [1] は対立するものではなく、同一の事柄の2つの

側面なのである。第二に時間を行為論的観点から捉えるからといって、本稿で中心に取り上げた目的合理的行為以外の行為、内的行為、企図を伴わない行動、知覚体験などとともに構成される時間を扱えないというわけではない。したがって必ずしも直線的な時間概念を前提とせず——時間形式ではなくその内容に関して——循環的時間や反復的時間、波状的時間といった多様な時間のあり方をも認める。より正確に言えば、特定の社会・文化・歴史を反映するものとして捉えられる傾向にあった様々な時間表象をひとりの人間のうちに見出すのである。第三に時間を社会的行為とともに構成されるものとして捉える。他者の行為に方向づけられ、他者の行為を方向づけるような相互行為のなかで時間を捉えることによって「社会的時間」について十分に論じることができる。そこでは、おもに他者との相互連関による「社会的現在」を中心とした諸時間システムの構成が主題化されるだろう。第四にベルグソンやフッサールのように空間に対して時間を優位に置くのではなく、時間と空間の相互規定的関係を重視する。行為は内的時間と外的時間を統合するだけでなく、時間と空間をも統合するからである (飯田 2016) [5]。

それでは、なぜ行為論的観点から時間を捉えるべきなのだろうか。それは何よりも、生活世界において時間は意味的現象として構成されるからである。そのような意味的現象を支えているのは、生活世界における各人の諸関心であり、とくに行為の諸目的だからである。しかしながら、三上によれば、「『大きな物語』が衰退しつつある今日のポスト近代的社会では、人間的主体や進歩の概念に代わって、自ら差異化し自ら組織化するものとしての自己と社会が論じられなければならない」 (三上 1995: 216) [9]。たしかに現代社会では、「大きな物語」に象徴される「歴史的時間」によって支えられ、前望的な時間意識に貫かれた「生産主義的時間」 (目的-手段図式) が衰退しつつあり、人々のあいだに多様な価値観や目的が広がってきている。とりわけ1970年代以降のグローバル化の進展と情報化社会の到来は、「歴史的時間」に収斂する価値と目的の共有を前提とした個人と社会の秩序だった存立を揺るがしていると見ることもできるだろう。そのうえで、現代社会における時間を、たとえば時間と空間の圧縮によ

る「今・ここ」の拡張、「客観的時間」と「主観的時間」との分離、時間の個人化、時間の加速化、継起性に対する同時性の優位、未来指向に対する過去または現在指向の優位、「現在」に留まることによる時間的停滞、空間意識における「そこ」に対する「ここ」の優位といったように特徴づけることもできよう。こうした観点からすれば、たしかに人生プランに収斂するような長期的プランのもとに行為する人間像や、目的－手段図式を中心に据えた行為論は時代制約的な考え方であり、現代社会にふさわしくないのかもしれない。近代社会とは根本的に異なると想定される時間原理に基づく脱近代社会なるものが今まさに到来しつつあるのだから。

しかし、諸個人の価値や目的がどんなに多様化しようとも、そのことと特定の個人の価値や目的が多様化することとは別の事柄である。個人に着目するならば、むしろ共通の価値を喪失した不安から、特定の価値や目的に固執することによって他者に不寛容になることが、ポストフォード主義と消費社会を背景にした「排除型社会」(Young 1999) [22]の構図だったはずである。だが、どちらの議論にしても、個人のなかに価値や目的が実体として予めできあがっていることを想定してはじめて成り立つ議論であることに変わりはない。このような見方は、何らかの根拠によって「秩序」を説明するT. パーソنزのような枠組みを前提として、そこからの偏差あるいは逸脱として現象を捉えることで成り立つものではないだろうか。従来の「歴史的時間」ないし「人間的主体」という出発点を「空間化された時間」ないし「差異的自己」(三上 1995: 237, 239) [9]に代えても、やはり行為者に先立って観察者が予め重要なものとして析出した何らかの根拠によって時間的な「秩序」を説明しようとする点ではパーソンズと同様である。そこでは、「時間とは何か」という問いや、その問いの形式に含まれる深刻な諸問題が考慮されることはないし、そのつどの状況に応じて行為が構成する多元的な時間のあり方が問われることもない。それゆえ、時間は暗黙のうちに実体視され、あたかも現代人にとって斉一的な時間が想定されているかのようである。こうした見方は、M. ウェーバーのように、社会的世界の意味的現象が相互主観的に一致していると想定して成り立つものではないだろうか。加えて、目的と手段という、それ自体実

体視された行為の構成要素が、「ない」という不変的なあり方で固定化されて捉えられる要素分析的発想も見られる。

様々な時間パースペクティブと 관련된多元的な諸現実や諸機能システムを問題にしようとするならば、時間をあらかじめ出来上がったものではなく、人々のそのつどの行為とともに多元的に構成されつつあるものと捉えなければならない。そこでは何よりも、具体的な行為の仕方や時間のあり方という外延を規定する可能性条件が問題となる。そのためには、シュッツが実践し那須が強調するように(那須 1992: 99) [10]、現在あるいはかつての時間のあり方についての判断をエポケーすることによって偶有的要素を排し、可能性としての時間のあり方について配慮しつつ、様々な態度と 관련된時間がそこから派生し構成される「志向的体験」までいったんは遡及した形式的分析が求められるだろう。そのうえで行為が具体的にどの程度の企図の幅を持ち、どのような目的や手段が設定されて(あるいは設定されずに)現実化されるのか、相互行為において時間がいかに意味づけられ、時間にいかに規定されるのかということが、経験的な水準で問われなければならない。

今日でもなお、時間を行為の軌跡と同一視することによって社会を無時間的なものと捉えたり、時間を行為の外的環境としてのみ捉えたりする傾向は、社会科学の領域において根強く見られるし、同時にそうした傾向への批判もしばしばなされている。だが、そのような批判は、たとえば「空間化された時間」に対して「生きられる時間」を、「自然的時間」に対して「社会的時間」を、「物理的時間」に対して「心理的時間」を、「存在」に対して「生成」を強調する点で、やはり二項対立の枠組みにとどまっておき、議論として恣意的なものが少なくない。日常の実感から著しく乖離するような議論を含めて、社会的時間に関する議論の混乱は——肯定的に見れば多様性は——その大部分が時間を実体視し、予め構成された時間から素朴に議論を開始しているか、さもなければ時間と行為を十分に関係づけていないことから生じているように思われる。時間という概念には人間の行為が含まれていること、そうした人間の行為はつねに歴史的、文化的、社会的状況とともにあること、けれども同時にそのような状況は当



の行為によって支えられ、あるいは変容されること、このような行為と状況の相互規定的な循環関係のなかで多様な意味内容を帯びた時間がそのつど構成されること、以上のことを踏まえることによって始めて、「社会的時間」に関する経験的命題を十分な根拠をもって導くことができるのである。

# 【注】

[注1] 「生ける現在」という概念によって示される現在の唯一性は、入不二の提示する「まさに現実化している今」という概念と部分的に重なるものと考えられる。入不二は「同時性としての今」という捉え方と、「動く今」という捉え方の両方が捉え損なっている今の局面を「まさに現実化している今」（第三の今）と呼び、この非時間的な「今」を現実世界の時間の要に位置づけている。そして、このような「今」をあらゆる大きさをとりうる円のようなものと捉え、12世紀の偽ヘルメス文書の写本に見られる「神とは、中心が至るところにあるが円周はどこにもない一個の球体である」という定義や、西田幾多郎の「現実といふ一つの中心を有つた周邊なき圓の如きもの」という表現を参照するよう、注意を促している（入不二2002）[6]。それに対して本稿では、本節の後半で触れるように「生ける現在」ではなく、その背景としての「見かけの現在」を無辺境なものとして捉えている。

[注2] 「重要なことから先に」という概念は、優先順位と要求順位の秩序に支えられているが、順位は必ずしも一元的には定まらない点に注意しなければならない。便宜的にある当面の目的を基準にして考えると、当面の目的に隣接する行為として、少なくともつぎの4つの行為が動機づけられるだろう。①当面の目的を達成するための行為（目的に対する手段）、②当面の目的を達成した後にするべき行為（さらに上位の目的に対する手段）、③当面の目的を達成する前のみ可能な行為、④当面の目的を達成した後のみ可能な行為、の4つである。これらのうち③と④は、当該の目的－手段系列には属さない別の行為が、すなわち直接当面の目的を達成しない行為（当面の目的を達成するための行為をしないこと）が動機づけられる点に留意する必要がある。ここには、3節で論じた人間の諸関心と相関した多元的な目的－手段系列を、したがって多元的な時間系列を指摘できるだろう。

[注3] 別の角度から見れば、志向的には内在しているが実的には超越しているとも考えられる。企図が構

成された時点とその充実ないし非充実のあいだに時を経ており（知識・レリヴァンス体系の変様）、予想されたことはけっしてその通りには起こりえないからである。さらに言えば、「過去」にせよ「未来」にせよその本質は「現在」のパースペクティブから様々な程度で——忘却にせよ期待外れにせよ——逃れる地平を備えているところにあるのだから。この意味で「過去」「未来」は「現在における過去」「現在における未来」との差異における相関にある。あるいは「まだない」「もうない」と「端的にない」とを区別して、志向性を無化するような後者を強調すれば、「過去」と「未来」の本質はそもそも「現在」のパースペクティブと無関係なところに求められるだろう。しかし、認識論的にはともかく実践的関心に規定された行為においては、当初の「現在」のパースペクティブに入らない諸要素は最後まで視野に入らないことも考えられるし、問題状況の契機となる新奇性に対しても、それを従来のパースペクティブに回収したり、あるいは新奇性を隠蔽し問題を先送りしたりすることも考えられる。なお、ミードは「見かけの現在」より拡がりを持ち、「過去」と「未来」をそのうちに含む行為における「現在」を「機能的現在」[functional presents]と呼び、「見かけの現在」と区別しているが（Mead 2002: 107）[8]、両者を同次元で語るために不明瞭な部分が少なくない。

[注4] 厳密に言えば、時間的推移には「見かけのここ」という空間地平も必要となる。「見かけのここ」については（飯田2016）[5]を、「見かけの現在」が自己言及的なあり方で「生活世界的時間」の地平の地平として構成される点については（飯田2009）[4]を参照されたい。

[注5] 時間的推移に関する本稿の見方は、時間を「純粹持続」と捉えるベルグソンと、量子論の影響のもとに時間を「エボック」と捉えるホワイトヘッドの中間に位置づけられるだろう（Whitehead 1927 [1981]: 171-175）[21]。なお、シュッツはかつての自己の部分死、あるいはより以前の生活形式が持続的に減することが老いの体験をさせること、人間存在の根本的事実である老いによって生じる時間の不可逆性——持続、世界時間、市民的時間の不可逆性——は死が不可避であるという意識とほぼ一致すること（Schütz 2003: 126）[17]、また個別的持続の交点として「標準的時間」（社会的時間）を捉えたうえで、そこに「標準的時間」の不可逆性が生じることを指摘している（Schütz & Gurwitsch 1985: 254）[19]。

[注6] ここでは、行為を媒介にして時間が時間を構成す

る契機がポイントとなるが、その際、ある時間と別の時間との差異、たとえば本稿の議論で言えば「見かけの現在」と「顕在的現在」との差異、あるいはかつて論じたように「体験的時間」から「社会的時間」が構成され、「社会的時間」が「体験的時間」を構成する場合（飯田 2009）[4]のそれぞれの時間のあいだの差異あるいは空隙は、時間の内部にあるのか時間の外部にあるのか、それとも差異化そのものが時間であるのかということが問題となるだろう。後者の場合には、時間は非人称という仕方働くような「機能」を意味することになるだろう。この点については、稿をあらためて論じたい。

### 【引用文献】

- [1] Adam, B, *Time and Social Theory*, Polity Press. (1990), (伊藤誓・磯山甚一訳, 『時間と社会理論』法政大学出版局. (1997))
- [2] Aristotle, *Aristotle's physics, a revised text with introduction and commentary by W. D. Ross*, Oxford University Press. (1955), (出隆・岩崎允胤訳, 『アリストテレス全集 3 自然学』岩波書店. (1968))
- [3] Augustini, A, *Aureli Augustini Confessionum Libri XIII*, B. G. Teubner. (1981), (宮谷宣史訳, 『アウグスティヌス著作集 5 (Ⅱ) 告白録 (下)』教文館. (2007))
- [4] 飯田卓, 「行為と時間——生活世界的時間の解明に向けて」, 早稲田大学大学院文学研究科紀要54(1): 67-81. (2009)
- [5] 飯田卓, 「行為と空間——生活世界的空間の解明に向けて」, 東京医科歯科大学教養部研究紀要46: 47-60. (2016)
- [6] 入不二基義, 「非時間的な時間——第三の〈今〉」 広中平祐子・金子務・井上慎一編『時間と時——今日を豊かにするために』日本学会事務センター学会共同編集室, 187-201. (2002)
- [7] James, W, *The Principles of Psychology Vol. 1*, Dover Publications. (1950)
- [8] Mead, G. H, *The Philosophy of the Present*, Prometheus Books. (2002)
- [9] 三上剛史, 「社会理論構成における「自己」と「他者」——〈差異的自己〉と〈空間化された時間〉」, 近代78: 215-251. (1995)
- [10] 那須壽, 「現象学と社会学——社会学の「基礎づけ」の諸相」, 情況別冊9: 86-103. (1992)
- [11] Schutz, A, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff. (1962)
- [12] Schutz, A, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff. (1964)
- [13] Schutz, A, *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, Martinus Nijhoff. (1966)
- [14] Schutz, A, *Reflections on the Problem of Relevance*, Yale University Press. (1970)
- [15] Schütz, A, *Theorie der Lebensformen*, Suhrkamp. (1981)
- [16] Schutz, A, *Collected Paper IV*, Kluwer Academic Publishers. (1996)
- [17] Schütz, A, *Theorie der Lebenswelt 1*, UVK. (2003)
- [18] Schütz, A, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, UVK. (2004)
- [19] Schütz, A. & Gurwitsch, A, *Alfred, Schütz / Aron, Gurwitsch Briefwechsel 1939-1959*, Wilhelm Fink. (1985)
- [20] 土屋賢二, 「時間概念の原型——プラトンとアリストテレスの時間概念」大森荘蔵・中村雄二郎・滝浦静雄・藤沢令夫編『新・岩波講座哲学7 トポス空間 時間』岩波書店, 36-67. (1985)
- [21] Whitehead, A. N, *Science and the Modern World*, University Press. (1927), (上田泰治・村上至孝訳, 『ホワイトヘッド著作集 6 科学と近代世界』松籟社. (1981))
- [22] Young, Jack, *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*, SAGE Publications. (1999), (青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂訳, 『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版. (2007))

### 【付記】

本稿は、2016年度早稲田社会学会研究助成による研究成果の一部である。